

## エラスムスの *De captandis sacerdotiis* (1522) について

木ノ脇 悦 郎

エラスムスは1522年3月にフローベン書店から出版された新しい『対話集』において、宗教改革者たちが厳しくカトリック教会に問い出していた問題を取り上げた対話を書いている。つまり、聖地巡礼の問題<sup>1</sup>、信仰告白の理解に関する問題<sup>2</sup>、そして今回取り上げた聖職禄に関する「聖職禄漁り」などである。

「*De captandis sacerdotiis* という対話において、私は次のような人たちを批判したのです。つまり、道徳もお金も深刻なほどに失いながら、それでも聖職禄を得ようとしてローマをうろつきまわっているような人たちです。また、司祭が妾ではなく優れた著者の書物を読んで楽しむための話をも作り上げました<sup>3</sup>と、エラスムスは1526年に書かれた『対話の有用性について』*De utilitate colloquiorum* の中で述べている。

この論述からも理解できるように、当時のカトリック教会と教皇庁の大きな悪弊のひとつに聖職禄をめぐるやりとりがあったということであり、エラスム

- 
- 1 聖地巡礼について1522年版に取められた作品は *De votis temere susceptis* (「無造作な誓いについて」) と題されたものであり、これについては本誌前号に掲載されているので参照のこと。なお、同様な趣旨の作品等についての解説も前号参照。
  - 2 *Confabulatio pia* (「敬虔な談話」) あるいは *Pietas pueniis* (「子供の信心」) と題された対話であるが、これはフローベン書店の二番めの息子、エラスミウスの為にかかれたものである。内容的には、信仰告白の問題や、司祭への懺悔の問題など当時の状況を色濃く反映したものである。拙論「エラスムスの *Confabulatio pia* (1522) について」『福岡女学院短期大学紀要』第21号 (1985)、p.9-30参照のこと。
  - 3 *in colloquio De captandis sacerdotiis taxo eos, qui Romam cursitant, venantur sacerdotia, crebro graui iactura tum morum tum pecuniae, eoque deduco sermonem, ut sacerdos pro concubina lectione bonorum autorum semet oblectet.* (ASD, 1-3, p.743, LB. Tom. IX, p.903参照)

スもその問題をカトリック教会が改革しなければならない深刻な問題であると認識していたのである。事実、聖職禄の問題は中世を通じてカトリック教会の大きな悩みの種であった。聖職禄の問題は教権と俗権との争いを生み出したのみならず、聖職売買という深刻な問題の根源ともなっていたのであり、諸教皇や公会議においても度々論じられたり改革が試みられたりしていたが、解決のつかないまま問題は宗教改革期まで引きずられていたのである。

宗教改革者達の批判を待つまでもなく、カトリック教会内部でもこの問題をめぐって改革の努力が続けられていた。例えば、ヴェニスにおけるカトリック改革者として重要なコンタリーニ (Gasparo Contarini 1483-1542)<sup>4</sup>は1516年に司教が担うべき責務について『司教の任務について』(*De officio episcopi*)を書き、その中で複数の聖職禄を得ることを禁止すべきであると主張したり、さらには聖職禄を得ている管区の司牧責任を果たすべきであるというようなことを強調しているのである。その主張はカトリック改革を進めるために召集された教会改革審議会の委員長としてまとめた『教会改革建議書』(*Consilium de emendanda ecclesia, 1536-37*)の中にも反映されているものである。つまり、この背景には複数の聖職禄を得て、しかもその管区には顔も出さないような司教があった事実が存在していたのである。

このような教会内の問題は教会分裂を回避しながら改革を進めようと試みるエラスムスにとって放置できないものであり、宗教改革運動が激しさを増していったこの時期に彼はこの対話を書くことによって警告を発し、さらに司祭たちの自覚を促そうとしたものであろうことは先に引用した『対話の有用性につ

4 Gasparo Contarini の神学思想がエラスムスのそれと類似性を持っていると指摘している論述はこの聖職禄について考察する場合重要な参考になるものである。D.S.Chambers, Gasparo Contarini, Ed. by Peter.G.Bietenholz, *Contemporaries of Erasmus: A Biographical Register of the Renaissance and Reformation*, Vol.1, Univ. of Toronto Press, 1985, p.334-335 ただし、エラスムスとコンタリーニが直接的な接触を持ったかどうかについては証拠となる書簡類が残されていないことから不明であるといわざるを得ないが、1507-8年にヴェニスあるいはパドゥバで出会った可能性は否定できない。また、レーゲンスブルク宗教会議でルター派との再合同をメランヒトンと共に話し合うが失敗した。その中にも彼の立場が示されているといえる。

いて』の主張からも明らかであるといえよう。

ところで、彼の対話には様々な人間が登場するのであるが、今回の対話における二人の話者、Pamphagus と Cocles について簡単に触れておこう。まず、Pamphagus であるが、もともとはギリシャ語からきた言葉であり、「食欲、大食」あるいは「雑食家」を意味している。対話の中で、ローマに聖職祿を漁りに行ったところからこの名前をつけたものであろう。また、彼の大きな鼻についての語りは例えば Rostand のシラノ・ド・ベルジュラクや Shakespeare の史劇『ヘンリー四世・第一部』のようなものを髣髴とさせるものである<sup>5</sup>。また、P. Smith によればこれはアムステルダムの Niholas Cannius (?-1555) と同一人物であるという。なぜならば、鼻についての叙述内容がエコランパディウス宛ての書簡 (1529・7・15日付) で Cannius の鼻について述べた表現を思い出させるからであるとしている<sup>6</sup>。

Cocles は同じく P. Smith によるとヘルトゲンボッシュの Peter Meghen (1466-1540) と同定されている<sup>7</sup>。彼は目が一つしかないメッセンジャーであり書記であった。その目の故に、彼は Cyclops とも呼ばれていた。Polyphemus また Cyclops というニックネームで知られていた。本文中では、対話の相手 Pamphagus に警告を与える役回りをしており、いわばエラスムスの立場を表して

5 「ヘンリー四世・第一部」のうち第三幕、第三場、ボアズ・ヘッド酒場でのフォルスタッフとバードルフの対話参照。『シェイクスピア全集』4 (中野好夫訳)、筑摩書房、1967、178-79頁参照。

6 Preserved Smith, *A Key to the Colloquies of Erasmus*, Harvard Univ. Press, 1969, p.8 参照、ただし、エコランパディウス宛ての同日付書簡は見当たらず、書簡番号2147 (1529・4・10日付)のエコランパディウス宛書簡がそれに当てはまると思われる。その中では次のように記される。Quum excuderetur colloquium Cyclops, quidam ex operis Frobenianis suspicati sunt quod dicitur de oue in capite, vulpe in pectore, deque longo naso, ad te pertinere; quum constet hoc lusum in Nicolaum Cannium famulum meum, qui cupiebat in Colloquiis celebrari. と、長い鼻を持った Cannius が対話の中で取り上げて欲しいと思っていたことが知られる。Allen, E.E. Tom. VIII, p.135.

7 P. Smith, op.cit. また、*The Contemporaries of Erasmus* によると、エラスムスは彼を書記または書簡、書物を運ぶ配達人としても使用しており、しばしば彼のことを Unoculus, Luscus, Cocles. また Cyclops、つまり「一つ目」と呼んでいたという。Ed. by Peter Bietenholz, op.cit., Vol.2, p.420-21.

いるものと思われる。従って、本文の訳文は聖職禄を求めている Pamphagus を貪欲でかなり乱暴な物言いをする人物として、それに対して Cocles は丁寧に語るものとして表した。

## 聖職禄漁りについて

Pamphagus (以下 Pam と略す)、Cocles (以下 Coc と略す)<sup>8</sup>

Pam: わしの目はそう遠くまで良くは見えんのだが、もしや古い飲み友達のコレスじゃないのかな。

Coc: いやいや、あなたの目は決して駄目になんかなってはいませんですよ。ちゃんと親友がわかったじゃないですか。あんまり長い間、あなたが帰ってこないものだから誰もあなたが帰ってくるなんて思いもしなかったし、誰もあなたがどこにいたかも知ってはいないのですよ。頼みますから、どこから帰ってきたのか教えてくださいよ。

Pam: 地球の裏側<sup>9</sup>からってところかな。

Coc: いいえ、わたしの考えでは幸運の島から帰ったということですね。

Pam: 親友を理解してくれて嬉しいねえ。だって、帰ってきててもまるでウリッセース<sup>10</sup>が戻ってきたのと同じようになるのじゃないかって心細かったんだよ。

Coc: ウリッセースが戻ったのはどんな風だったのでしょうか。

Pam: 嫁さんさえ気付きやしなかった。ただ年老いた犬だけが尻尾を振ってご主人様を迎えたってわけさ。

8 版によっては、話者の立場が入れ替わっているものも見られるが、この訳では ASD 版に従うものとする。

9 1533年版の対話 *Problema* にも同様の表現が見られる。拙論「エラスムスの *Problema* (1533) について」『神学研究』第45号、関西学院大学神学研究会、1998。

10 Ulysses、ウリッセースまたはウリクセースで、オデュッセウスのローマ名。犬だけが彼の帰還に気づいたという話は、オデュッセウス、第十七書に書かれている。ホメーロス『オデュッセイア』下 (吳茂一訳)、岩波文庫、1972、149ページ参照。

Coc: いったい彼は何年家を離れていたのですか。

Pam: 20年ってとこかな。

Coc: あなたはもっとですよ。でも、わたしはあなたの顔を間違ったりはしなかった。でも、いったい誰がウリッセースについてそんな話をしたのでしょうか。

Pam: ホメロス。

Coc: ああ、どんな物語でも創ったといわれているあの人ですか。おそらく、嫁さんはその間に他の雄牛でもものにしたんでしょうかね。だから、自分のウリッセースにさえ気が付きやしなかったのでしょうかよ。

Pam: そうじゃない。彼女ほど貞潔な人間は他にはいなかったんだが、パラスはウリッセースが分らなくなるように年寄りにしちまったってわけだ<sup>11</sup>。

Coc: では、どうやって彼が分ったのですか。

Pam: 足の指にあった瘤さ。今じゃすっかり年取ってしまったウリッセースの乳母が、奴の足を洗っていて気付いたってことさ<sup>12</sup>。

Coc: へー、全く注意深いばあさんですね。ところで、もしわたしがあなたのその目立つ鼻で気付いたとしたら驚きますか。

Pam: この鼻のことで今さら不快にもなりやしなさいさ。

Coc: その道具があなたにいろんなことをもたらしてくれるのですから、そりゃあ悔やむことはないでしょうね。

Pam: どういうことかな。

Coc: まず、ランプを消すのに使えるし、角笛の代わりもするでしょう。

Pam: それから。

Coc: 次に、深い穴から何かを吸い出そうとでもするなら、ネズミ捕り器の代わりにだって使えるでしょう。

11 パラスはアテーナー女神の呼称の一つで、オデュッセウスの旅の終りに出会い、彼の帰還に先立って策を施し、老人の姿で故郷に帰るようにする。『オデュッセイアー』第十三書の終りの部分に書かれる。上掲書32-33ページ。

12 『オデュッセイアー』第十九書、上掲書222-223ページ参照。

Pam: ありゃ、まあ！

Coc: それに手がふさがっている時は杭の代わりに也使えますしね。

Pam: その他には。

Coc: ふいごがなくても、籠の火をおこすのに役立つじゃありませんか。

Pam: 見事に言ってくれるね。で、他には。

Coc: ものを書く時に光が邪魔になれば、シェードの代わりに陰を作ってくれますね。

Pam: ハ、ハ、ハ。もう他に言うことはないのかい。

Coc: 海戦ともなれば、そう、鉤竿の代わりに使える。

Pam: じゃ、地上戦の場合は。

Coc: そうですね、盾の代わりになりますか。

Pam: まだ、他にも何かあるかな。

Coc: 木を割るための楔。

Pam: 結構、結構。

Coc: 触れ役を努めるなら、ラッパになることでしょうし、進軍ラッパとしての角笛、土を掘り起こす為の鶴嘴、刈り取りのための鎌、航海のための錨、食堂ではフォーク、それに釣り針にも使えますね。

Pam: なんて幸運なんだろう。わしは今までそんなに便利なものを持ち歩いてるなんて全然気付かなかったぞ。

Coc: ところで、あなたは今まで世界のどこにいたのでしょうか。

Pam: ローマよ。

Coc: そんなまぶしい所であなたが生きていたことを誰も知らないなんてことがどうしてありえたのでしょうか。

Pam: 善人なんて何処にも見つかりはしなかったのよ<sup>13</sup>。実際、人だかりのす

13 ローマの道徳的退廃を指している。エラスムスは1523年8月版の『対話集』の中に *Adolescentis et scorti* (『青年と娼婦』) を書き、その中で娼婦に語らせている。 *Atqui inde solent redire deteriores* (そこから悪くなって帰ってくるのがおちでしょう) と、ローマに行くことによって人間が悪くなることを指している。ASD. 1-3, p.341参照。

る所で一番明るい光を点けたって、結局何も見つけることがないってことがままあるだろうが。

Coc: だから、あなたは聖職禄をいっぱい詰め込んで、わたしたちの所に戻ってきたわけですか。

Pam: もちろん一生懸命手に入れようと努力したさ。だけど、狩の女神様は好意を示しちやくれなかったな。だって、ローマでは大勢の奴等が金の釣り針を使って釣りをしていたのさ<sup>14</sup>。

Coc: 何という馬鹿な釣りをするのでしょうか。

Pam: 誰もがこの賭けに当たったわけではないにしても、何人かの連中は立派に成功してたのさ。

Coc: 金と鉛を取り替えるような人が、全く馬鹿げていないですって。

Pam: だけど、おまえさんは知らないんだよ。聖なる鉛の中に金の鉤脈が隠されてるってことを。

Coc: それで、あなたは Pamphagus 以外の何もわたしたちの所に持ち帰らなかったということですか。

Pam: それは違うな。

Coc: それじゃ、何を？

Pam: 大口開いた狼さ<sup>15</sup>。

Coc: ロバのように司祭の重荷を担う者こそが幸せになるのでしょうか。どうし

14 *Piscantur hamo aureo* と表記されている。諺で *Aureo piscari hamo* というのがあり、「黄金の釣り針をもって魚を釣る」の意で、エラスムスはこの諺をその『格言集』でも採用しており、概ね次のような解説をつけている。この諺の意味するところは、少しのものを得ようとする欲求の為に実に大きなものを失うことを言うのであり、たとえ欲したものを得たとしても、ほとんど良いことはないし、私たちの欲求が空しいものであれば、結局多くを失うことになる。エラスムスはこの諺に類するものをステトニウス、オヴィディウス、プラウトゥスなどの格言から集めて、先のような解釈を施している。LB. Tom. II, p.468, CWE. Vol.33, p.105.

15 『格言集』において、エラスムスはこの格言のいくつかの用法を紹介しているが、その意味は、何かを得ようと望んで大きな努力をしたが、失敗することである。つまり、餌食を目の前にしてそれを取り逃がした場合、狼が大口を開いていることであると解釈している。ここでは、前の Pamphagus と合わせて貪欲であったが失敗したことを示している。LB. Tom. II, p.508, CWE. Vol.33, p.167.

てあなたは妻よりも司祭になることを選んだのでしょうか。

Pam: 何故って、わしの気に入っているのは安穏な生活なのさ。エピキュロスの生活ってのがお気に入りなのさ<sup>16</sup>。

Coc: 美しく若い女が家にいて、毎日好きな時に抱擁することのほうがずっと快適な生き方だと私は思いますがね。

Pam: そうだろうさ、だが、そうしたくない時もたまにはあろうよ。わしが愛しているのは永遠の楽しみなのさ。妻を手に入れる奴は一ヶ月は幸せだろうが、豊かな聖職禄を手に入れた奴は生涯楽しみを味わえるってことさ。

Coc: でも、孤独はやはり憂鬱なものですよ。もし神がエヴァを与えなかったとしたら、アダムは楽園でそんなに楽しく生きることはできなかつたでしょうし。

Pam: 豊かな聖職禄さえありゃあ、エヴァにこと欠くこともなからうさ。

Coc: しかし、悪い噂や良心の呵責に付きまといられる快楽が快楽とはいえないでしょうに。

Pam: そのとおりさ。だから、孤独の不愉快さをまぎらす本の物語がわしの心にはあるのさ。

Coc: だけど、それによってお仲間が喜ぶわけではないでしょう<sup>17</sup>。ところで、あなたは釣りにもどるおつもりなのでしょうか。

Pam: ああ、新しい餌の用意さえできればな。

Coc: 金でしょうか、それとも銀でしょうか。

16 エピキュロスの生活については、エラスムス自身1533年版の対話集の中で詳しく書いている。拙論「エラスムスの Epicureus (1533) について」『神学研究』第46号、関西学院大学神学研究会、1999参照。

17 「ところで」以下の台詞が、この対話の初版（1522年3月版）から1524年3月版までは Pamphagus のものとなっており、従ってその次の Pamphagus の台詞は Coles が語り、以下すべて現在の話者と反対になっているが、1524年9月版以降の構成はわれわれが用いている ASD 版のように変わっている。1524年9月版の段階でエラスムスは対話の進行にとってそのほうがふさわしいと判断したものと思われる。



Pam: どっちでもいいさ。

Coc: 心配なさらなくても、お父様が十分に与えてくださるでしょうよ。

Pam: あれほどけちな奴もいないからな。わしが元手をすってんでんに擦っちまったのを知ってるもので、二度と信じちゃあくれまいよ。

Coc: それが賭けの習わしでしょうに。

Pam: だが、この賭けはあいつにとっちゃあ嬉しくないのさ。

Coc: では、彼が断ったとしたら、どうすればあなたが欲しいだけのお金を手に入れることができるかを教えてあげましょうか。

Pam: 嬉しいねえ。教えてくれよ。もうわしの心は飛び跳ねてるぜ。

Coc: 目の前にあるじゃありませんか。

Pam: 何か宝物でも手に入れたのかい。

Coc: 私が手に入れたとしたら、それはあなたのためでなく自分のために手に入れたのですよ。

Pam: 百ドゥカーテンも掻き集められりゃあ、望みが叶ったろうになあ。

Coc: 十万も集められる場所を教えてあげましょう。

Pam: 喜ばせてくれるじゃないか。あまりじらさずに、早く何処か教えてくれよ。

Coc: Bude の *De asse* (『貨幣について』) ですよ<sup>18</sup>。その中に、あなたは金貨でも銀貨でも数え切れないほど見つけられるでしょう。

Pam: 冗談は止しにしようぜ。わしが金を手に入れた所からあんたにも払ってやるからさ。

18 Guillaume Bude (1468-1540)、フランスの代表的な人文学者であり、政治家としても宮廷に仕えたり、イタリアへ大使として遣わされたりするが、フランスにエラスムスを招聘する為に力を尽くしたことで彼との親交が深まっていった。1515年には *De asse et partibus ejus* (『貨幣とその関係について』) を書き、この書物によってフランスにおける人文学者としての名声を勝ち取った。エラスムスもこの書物の読者であり、高く評価していた。内容は、古代の貨幣の価値とその利用について、また古代の富についての著述である。この対話でそれをを用いているのは、Bude の書物を読むことの有益さを指し示しているものとも取れるし、あるいは読書の有益さと同時に古代の富について言及しているとも思われる。*Contemporaries of Erasmus*, Vol.1, p.212-217, *De asse* については特に p.214-15参照。

Coc: あなたは払うでしょうけど、でもそれは私があなたに払った分でしょう。

Pam: ああ、おまえさんの洒落は分ったぜ<sup>19</sup>。

Coc: 事実以外、私には洒落なんてものは何ありませんよ。

Pam: おまえさんほど洒落っ気のある奴はいやしないよ。洒落以外の何でもないさ。

Coc: 真面目なことでふざけているのはあなたですよ。私はそのことで笑うよりむしろ怒ることができるでしょうに。それはもっと深刻なことなのですよ。笑えるようなことじゃないでしょう。あなたがそこにいたら、あなたは決して笑いはしないでしょう。

Pam: わしはおまえさんにとっちゃお笑い草だろうよ。おまえさんはわしを遊び、笑いものにしてしているのだからな。おまえさんは決して冗談にはならないことでわしを冗談に使ってるのさ。

Coc: 私は決してふざけてなんかいませんよ。事柄そのものを私は語っているのです。決してふざけておりません。むしろ事柄そのものを語っています。真剣に語っております。心から語っています。単純に語っています。真実に語っています。

Pam: おまえさんがいつも頭に頭巾をきちんと被っているかぎりでは、そんなふうに単純に語るだろうさ。だけどわしは家を立ち去ることをためらっているのさ。だって、そこには何でもあるだろうってことを知っているものな。

Coc: あなたは新しい大きなことに会おうでしょうよ。

Pam: 信じるさ。だが、全部がわしの気に入ることならいいんだがな。

Coc: なんでも望むことができましようよ。しかもこれまで誰も遭遇したこと

19 この Pamphagus の台詞とつぎの Cocles, その次の Pamphagus の台詞は一種の語呂合わせを含む洒落である。つまり、nasus (鼻) と nasutius (長い鼻を持つ、洒落っ気のある、辛辣な、鋭い) の両方の単語を使い分けて、一種の地口としていたのである。従って、直訳をすれば次のようになる。「あなたの鼻を私は理解した」「事実と比べ、私にはどんな鼻もない」と。この鼻 (nasus) を次の nasutius に懸けて「洒落」と訳した。

のないようなことに。

Pam: 巡礼行がわしら二人に何かふさわしいことを示してくれるだろうよ。これからは家のほうが好ましくなるだろうってことを。

Coc: それはわかりませんよ。私はある人が七度も急いで帰ってきたのを見ていますがね。もし一度始めたなら、そのような渴望は終ることなく渴望し続けるのが習わしなのですから。